



谷脇素文画「按摩と犬」

大菩薩の水

慶長八年（一六〇三）、徳川家康が江戸に幕府を開いてから二代秀忠を経て、三代家光の時代までに半世紀の歳月が流れ、この間に江戸に人口が集中して、町は殷盛をきわめていた。古昔、青丹よし奈良の都の人口は二十万といわれるが、家光当時の大江戸の人口は百万に近いであろうと推定されている。おそらく世界第一流の大都会であったであろう。

二代秀忠の時に江戸は未曾有の大火に見舞われ、その後も江戸の華といわれた火の手が八百八町の各所に拳がり、家康が入城の際布設した神田上水も、増大する人口を賄うには足

水の上小物語

吉田 吉之助
長崎 拔天・画

らず、水不足を訴える町民の声が喧しかった。

名君といわれた三代家光は江戸の町造りに専念していたが、特に給水策に意を用い、その対策を町奉行・神尾備前守元勝に命じ、神尾は大菩薩嶺に源を発する多摩川から水を引くことを企画し、世にいう「玉川上水」の計画を立案上申した。この案が確定したのが慶安三年（一六五〇）で、家光はその翌年に空しく他界した。

四代を嗣いだ家綱は父の遺志を承継ぎ、これに応ずるといふ意味か、「承応」と改元し、この案を評定にはかった結果、承応二年正月三日実施が決定された。工事総指揮に水道奉行・伊奈半左衛門忠克が任命され、総工費七千五百両（一説には

六千五百両)を当て、着工の運びとなった。半左衛門は工事請負人に、多摩川在の富農・庄右衛門、清右衛門兄弟を推挙した。命ぜられた兩名は非常な感激をもって実行を誓い、江戸幕府開設五十周年にあたる承応二年(一六五三)の春二月十一日の紀元の佳節を卜して工事を開始した。

水の取り入れ口、西多摩の羽村から江戸まで十里余丁(四十三軒)の落差が僅か百数十尺ということ、この道程を自然流水で導くことは容易でない。彼等兄弟はまず多摩川在の百姓数十人を人足として雇い入れ、これらに夜々提灯を掲げさせて地勢の高低を計測し、ついに、羽村から小金井、高井戸、淀橋を通り、大木戸から四谷を経て千代田城に至る水路を発見した。



玉川兄弟の銅像(羽村)

羽村から大木戸までは素掘り(開渠)で、大木戸に「玉川御上水御改場」という貯水池を設け、この池の堰で水量を調節して、過剰分は渋谷川に落とし、必要量だけを府内に導入した。大木戸以東の街路に木樋とよぶ檜材の箱管が埋設され、この管が將軍家専用水道として半蔵門から城中に導かれた。これに沿って万年石樋とよぶ通水溝が掘られ、この溝は石蓋をかぶせて暗渠とし、人馬の交通に支障なからしめた。石樋の組み石には、それまでに江戸城の補修拡充に使われていた伊豆石が船載されて用いられた。石樋の水は四谷見附で外濠に注がれ、二つに分かれて一方は紀の国坂に沿って赤坂に落ち、一方は市ヶ谷からお茶の水へと流れて江戸城の外濠を充たした。

江戸時代にはこのほかに、その後、三田用水、桜上水など数々の民間用水の建設をみたが、その中でも最大の規模をもつ幕府直営の玉川上水を含めると、水路の全延長は江戸から近江の彦根に至る東海道の距離に等しいといわれる。

木曾檜

幕府は検討の結果、大木戸から江戸城へ引き込む將軍家自家用水道の木樋に木曾檜を用いることとした。これは木の狂いが少なく、永年腐蝕に耐えて漏水のおそれのないものとして選定されたものである。そして木曾を領有する尾張藩にこれが供出を命じた。材の規格は白肌おとしの芯去りで、厚さ

三寸、巾尺五、長十五尺の板材の木取れるものと指定され、特に節に気をつけるよう、との達しであった。

古来、檜の美材を産する木曾の山林は、今では国有林が多いが、昔は天領(皇室御料)となっていた。徳川の天下になった時にいち時、家康の直轄地に組み入れられたが、家康死亡の前年・元和元年(一六一五)に尾張藩の所領に移された。尾張藩では山林管理の代官を置き、山村氏が代々その役職にあつた。

木曾檜は古くは足利義満が金閣寺造営に用い、徳川家康が江戸城に用いたほか、伊勢大神宮の遷宮や勅願の神社建立など特殊の場合を除いては伐られないことになっていた。尾張藩の所領に移ってからは、特に、扱伐(造林のために木を掴んで間引きすること)の材を名古屋に集め、特殊の関係筋へ分譲することはあつたが、一般には金で買えない得難い物とされていた。

そんな訳で、木曾には昔から盗伐防止の掟が存したが、承応時代に水道材を搬出した直後に、掟を一層強化し、寛文五年(一六六五)に「留山」の制を公布し、住民の山林立入りを厳禁し、更に「停止木」を定めて、五木(ひのき、さわら、まき、あすひ、ねずこ)を明確に規定し、この禁令を犯して木を伐る者あらば、(木一本首一つ)の厳罰を課すると布令した。木曾の住民は五木の枯枝を拾うことすら怖れていた。

さて、水道材供出の幕命が尾張藩に伝達され、藩の指示が

山元を下達されると、山村代官は山廻り役を動員して立木を吟味し、春を待たずにこれを伐採して、雪融けの木曾川を下して伊勢湾より海路江戸へ輸送した。

江戸に揚げられた丸太は、四谷に運ばれてから木挽によって所定の寸法に割られ、大工の手で四角な箱管(外法尺五、長十五尺)に組立てられた。組立てに用いた釘は指の太さの角釘で長さ六寸、原料には山陰に産した砂鉄を用い、鍛冶職が一本づつ鍛ったものである。これは純度の高いねばりのある鉄で、当時は刀の材料として貴重なものであつた。

四谷界限

当時四谷の大通りを挟んで、南に天王横丁、石切横丁、法蔵寺横丁、北におかりや横丁、荒木横丁、湯屋横丁などがあつた。これらの横丁に諸方の仕事場が分かれていて、たとえば石切横丁には石工の職場が置かれていた。

水道工事の進行中は道路が掘り起されて、工事用の車が店頭に放置されたり、石や木材が裏木戸の出口を閉じたりして住民は甚だ迷惑をこうむつたが、水を待望する住民はこれらのことには不服を唱えず、全面的にこの事業の遂行に協力した。或る者は住居を飯場に提供し、また或る者は店先に湯茶奉仕の掛け茶屋をつくりたりした。

湯屋横丁には酒商・安井屋三左衛門の店があつて、店頭のみさしに菰をつるして目隠とし、そのかげに据風呂桶が幾

つか並べてあった。これは安井屋提供の無料浴場である。汗と泥にまみれた労務者が一風呂浴びてから、ヘヤスイ・スタンドで安酒をひっかける仕組みになっていた。

この時代は前年に起った由井正雪の叛乱に続いて、浪人の叛く者が跡を絶たず、幕府は関所の制を定めて浪人をあらためたり、海船法度令を出したり、切支丹を探索したりして、乱れがちの治安の維持に努めていた。

そんな世の中で士農工商の下積みになっていた人足や渡り職人にとっては、玉川御上水御用という將軍家直属の肩書きは、天下御免の金看板を背負ったようなもので、彼等の得意や思うべしである。こういう一般社会の秩序から逸脱した特殊集団の無法ぶりは、全く目にあまるものがあり、四谷界隈の住民にとっては悩みの種であった。

大工派と土工派が対立し、全勝寺の庭で棍棒をふるって闘したとか、石工たちが石を投げて与力に頻死の重傷を負わせたなどの事件が、ひきもきらず起っていた。あげくの果ては物欲にかられた彼等は、開店休業状態の商店を占拠して、店主にインネンをつけ、身をちぢめているその家族におどし文句ですごみ、莫大な家賃敷金を要求し、応じなければ退去せよと、松火を振り廻して威嚇したりした。

町民が水道工事の進捗に協力する仕草は、彼等の狼藉を和らげながら、工事を一日も早く捗どらせようとする下心もあつてのことだった。



無法地帯の四谷附近で最もはげしかったのは湯屋横丁で、女人禁制は勿論のこと、帯刀の武士でさえ私用では立ち入らず、町奉行も一種の治外法権地域とみなして、この横丁の取締りは手控えている始末だった。

按摩独語

承応二年の師走もおしつまった或る夜、玉川上水請負人の庄右衛門は四谷大木戸の旅籠・大黒屋の二階に居た。心身ともに疲れ果てていた彼は、据えられた膳にも箸をつけようとせず、ただ何ごとかに思いふけている様だった。膳に立てられた二合徳利が冷えて時が過ぎていた。庄右衛門は膳をさげに来た女中にハツとした様子で雪の模様をたずねた。女中は赤い手を火鉢にかざして、「今夜は大雪になるかも知れませんがね」と云った。

音もなく降る雪の街を流して来る按摩の笛の音が聞こえてくる。彼は女中に按摩を呼ぶように命じて、そばに敷いてあった布団に横になった。やがて襦袢が開いて按摩が招じ入れられると、燈芯が風をくらって、按摩の影が大きく壁に揺れた。按摩は白い呼吸で、「もう一寸も積りましたらどうか」と、揉み手をして雪の話で挨拶をした。

下から揉みにかかると肩から首筋にかかる、「旦那、首の凝りがひどく御座います」と云って、その辺をさかんに揉みほぐした。そんな間に、「お武家様でもなし、お商人さんでも

なし……」などと独り言を云い、「玉川御上水のお方さまか、な」と云う。ピタリ役柄をあてられた庄右衛門はドキンとした。上下を揉み終った按摩が首筋から頭にもういち度、念を入れた揉みを入れて、「何か御心配ごとも……」と問いかけた。問われた庄右衛門は、積もる年輪が重なる年輪が知らず、さすがに偉いと按摩の勘どころを賞めた。

西風がたつて時に板戸が鳴る。女中がさいぜんの燗冷ましをつけなおして持って来る。庄右衛門はもう一、二本つけて来いと、女中に命じ、起き上って居ずまいを正し、火鉢に炭を注ぎ、按摩に座布団をすすめた。

按摩は一膝さがって、遠慮がちに辞退するふうだったが、庄右衛門が「燗冷で申し訳ないが……」と差し出す猪口を押し戴くように受け、注がれた一合をゴクリと飲み干し、堪能の風情を示していた。庄右衛門が残りを独酌でやっている間に、また女中が上つて来、ひね沢庵を添えた四合徳利の盆を二人の間に置いた。

按摩は座布団からおりて、指を折り曲げながら、「いよいよ吹雪き始めましたようで」と、帰りの道に心を馳せながら揉み賃を待っている様子だったが、庄右衛門は、「もう一杯」と新しい徳利を手にした。そして、「首の貴公にどうして儂の分限がわかるのか？」と訊きただすのであった。舌なめずりして返事をためらっていた按摩は、外の吹雪に気をとられる様子で、暫く黙っていたが、二杯目を飲み終わると、これ以

上はいけませんという手振り酒を辞退し、手にした猪口を横脇に押しやり、むき出しの白眼を自分の指でさして、「旦那に賞められた手前の勘は、これじゃござんせんで、こつちの方でござんす」と云って、その指を自分の鼻の穴に押し入れて、ひねって見せるのである。そして、いい気嫌で、「御馳走分だけ揉まにや」と、気安い口調に変わり、庄右衛門に横になれとすすめて、「雪は一閃を鎖して歩前まず、酒は半生を廻りて家路を忘れしむ、知んぬ汝の傍に侍る応に縁あるべし、……」と、低吟しながら再び揉みに入った。

木曾 谷

俺は木曾の敷原の水呑み百姓の家に生まれ、物心ついた頃にはおふくろの手ひとつで育てられていた。九つの時にひどい飢饉があつて、蕨や葛の根を掘って露命をつないだ。おふくろは口減のために俺を福島の木挽のところに預けた。

夫婦二人きりで子のない木挽の親方は、俺を実子のように可愛がつてくれた。俺はそこで懸命に木を挽きつづけた。年期が積むに従つて背中が丸まって、猫の五郎七と称された親方にそつくりとなり、世間では親方を猫七と称び、俺のことを猫八と称んだ。この親方は信心が厚く、また学問の素養があつて、俺に四書の素読を授け、唐詩なども教えた。

招ばれた。若い頃から腕達者だった親方は、上は福島、上松から下は美濃中津あたりまでのお大尽の建築には必らずといふくらい手を出していたから、俺もこの十年間にかんりの物持ちの新築披露について廻っていた。

この日、俺はおかみさんが織つてくれた盲縞の単衣の筒つぽに半纏をひつけて親方のお供をした。披露の席には小袖に大小をたばさんだ生衆たちが兵頭に從つて上座を占めていた。俺は下の座に控えて彼等の様子を見ていると、彼等は唐土の煎茶碗を手にし、生意気にも高台なぞさすつて、「これは京焼でござらう」「いや唐津でござらう」などと一人前の御託を並べ、膳が出て酒の席になると、「この塗は輪島でござるか、平沢でござるか」「いや根来でござらうぞ」などとほざく。

俺が徳利を手にして生衆に注ぎに出ると、木の嗅ぎ分けについては人後に落ちぬ俺様を前にして、「三間通しの檜の長押は立派でござる」とか、「あれよ、障子の骨にいたるまで総檜で申し分がござらぬ」などと、満座に聞こえよがしにお追従をついている男がいる。

このへんが俺のもつて生れた悪い癖で、黙つて放つて置けばいいものを、つい口を出して、「失礼とは存じますが、長押の材は杉で、障子の骨はあすひでございます」と教えてやると、彼等は互に顔をつき合せて、なあんだ、たかが木挽の小僧の分際で……という目つきで俺の方を見る。

いつしか十年の年期が明けて、俺が十九になった時、福島で大鋸屑の嗅ぎわけ競技があつて、五木を一発の狂いもなく言い当てる、俺は代官から感状を貰つた。その年、親方は還暦を迎え、寄る年波に身体もめつきり衰えたので、代官屋敷の新築材を挽き終えたのを最後に、仕事をやめて引退してしまつた。俺は御礼奉公のつもりで、相変らず丸太の年間挽きを続けて、親方夫婦の食い扶持まで稼いでいた。

その頃、木曾では盗伐が流行つて、民有林だけでなくお上の山にまで盗み及ぶようになった。尾張藩では、代官が屋敷を新築することにも疑いの目を向けたが、だいたいその取り締りが手ぬるいといつて、兵頭嘉門という武士を代官の目付役として差し廻して来た。

風頭無頼

兵頭には十数人の若い手下がついて来たが、その大方の者は前髪は剃つてはいるが、揉み上げを剃らずに、米嚙みから首筋までザンバラ髪を垂らして風頭のような格好の者が多く、無頼の年長らしい男は無精髻を生やした貧乏鐘馗のような風体であつた。この者共は武家の子弟らしい教養もなく、さりとて、山のことにについては皆目暗く、材木の「へぎ」の字も知らない者達で、村の者は彼等を生半可とか生兵法の生をとつて「生衆」と称んでいた。

或る日、代官屋敷の新築披露があつて、親方について俺もそのうちに代官の娘の美代が唐棧に黒繻子の衿をかけた台所姿で席に来て酌に廻つた。青二才共はお美代に「ちゃん」をつけて馴々しく呼びかけ、こんどはきざな町方弁を使つて「頭の桃割れがスゴく格好いい」とか、「腰の線が魅力的だ」とか、人間と人形を取り違えたような失敬なことを云い放ち、満座の中でお美代をからかうのである。主人の代官も居並ぶ客も苦そうな顔で酒を飲んでしたが、隣に居た大工の又六が俺の膝をつつて、「これさ、沐猴にして冠すとは奴等のことをいう。大工は元来、木工だが大の字がついているわい」と小声でささやくのである。

あすひ問答

そのうちに、お追従を放つた髻の男が徳利をさげて俺の前に罷り来て、「拙者、美濃の国は太田の郷士・梅林藤吉郎の四男藤四郎と申す者、少時より忍びの道に志ざし、逐電流を研鑽すること十余年、諸国遍歴の途次、兵頭先生に邂逅、腕前を見込まれ此の度扈從、当地に罷り出でし者、何卒末ながくお見知り置き願ひたい」と名乗るのである。そして「貴公は？」というので、そこで、「拙者、敷原の百姓・名梨野権兵衛の嫡男、俗称猫八と申す者。何も取り得はござらぬが、変木流木挽の業に励むこと十年、材の鑑別については昨今輿許となり申した。何卒お忘れなき様……」と応じた。すると彼は、「先刻、貴公があすひと云われたが、その材は如何なるもので